

の接着強度，耐水性の改善であった。卒業研究で来る学生は陸軍士官学校とか海軍兵学校などを卒業した人達が多く，肝の座った青年という感じであった。フェノールフタレイン樹脂や尿素樹脂を変成して，木材を接着し，強度試験を行っていたが，私は学生達のたまり部屋に机を置いて居ればよく，どちらかと言えば楽な仕事で，本を読む時間は充分あった。

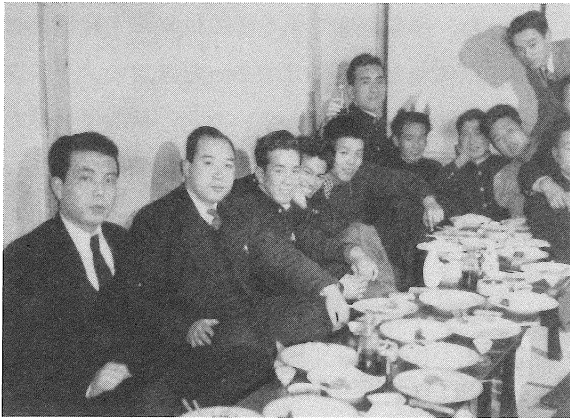
2年生の学期末試験のときは，酒の爛を付ける要領で熱湯の入ったビール瓶をつくり，タオルで巻いて湯タンポとし，分厚い木製実験台の上に毛布を袋のように折ってもぐり込み，火の気のない研究室に何日も泊り込んで勉強した。通常でも終電で帰ることはしばしばで，校舎の門が10時過ぎに締るので，3階の窓を伝って非常階段から出たものであった。今にして思えばよく転落事故を起さなかったものである。

こうして3年生の前期試験が終わったある日，体が鉄棒で叩かれたように疲れ，肩がこり，熱っぽい日が続いた。日大病院に行つて診察を受けたところ，肺浸潤ということであった。このころ結核は不治の病というわけではなかったが，大変な病気であることは間違いなく，研究室の学生で気胸と言って，肺と肋膜の間に空気を入れ肺を安静に保つ治療を受けている学生がいた。私はその必要はなかったが，夏休みに入る時期であったので，両先生にお願いして田舎に帰り療養することになった。

結局翌年の3月中旬まで半年以上病院のベッドで専ら安静にした。その頃貴重品であったペニシリンも打ち，全快したということで東京に出て来た。そのときは既に3年の後期試験は終っていた。幸い2～3課目は宿題となっていたものがあり，単位は充分あったので4年生に進んだ。卒業論文は「鉄筋コンクリートの電食に関する研究」をとり，文献調査を行った。これは後年鉄筋の通電加熱によるコンクリートの剥離解体工法の着想に役立ったかも知れない。

1953年3月学部を卒業し，その後も研究室に残らないかということになり，松井先生の研究の助手や，先生のアルバイトのRC造建物の構造計算，鉄骨映画館の計算などを手掛けた。これはその後材料の勉強に大変役立った。卒業して1年が終ろうとする頃，大学院に進学してはどうかという話があり，4月から工学研究科建設工学専攻に進んだ。これは土木と建築学を合体したものであった。大学から給料をもらいながら勉強ができたのは幸運であった。この時期は授業のないときは，専ら実験の指導を行った。昼間部・夜間部学生の実験Ⅰ，Ⅱ，短大生の実験とそれは，それは忙しかった。何とか切抜けることができたのは研究室にいた何人かの研究生の協力によるものであった。時間を見計っては図書館に行き，建築雑誌をはじめ材料関係の論文を読みあさった。お蔭でこの分野の研究は何処の誰が行っていると言うようなことを知ることができた。

日曜・祭日はもとより，夏休み，冬休みも休むことなく，学部の卒業研究の学生と一緒に修士論文の実験を行った。「コンクリートの疲労に関する実験研究」をとりまとめ，日本建築学



左から2人目が松井嘉孝先生（1960年頃）

会に報告した。大学院を修了したとき就職する積りでいたが、更に大学に残り、教育と研究を続けることができた。

最後に言葉に表せないほどお世話になった江崎、松井両先生について述べさせていただきたい。江崎先生は日大高工第1回の卒業生で、その後ペンシルベニア大学に留学され、学部から大学院に進み、建築学修士をとられた。専門は建築計画で、「高等建築学第20巻」（昭和10年、常磐書房）のうち、図書館の執筆を担当されている。大太平洋画会の会員でもあった。大学では構造力学Ⅰを教えられた。松井先生は日大高工建築科を卒業され、特攻魚雷艇の隊長で敗戦となり、大学に戻られた、専門部、工業高等学校の鉄骨、材料などを教えておられた。学生の顔と名前、電話番号を覚えること、コンピュータの如くで、これが全く不得意の私はいつも劣等感をいだいたものであった。

さて、ここまで我慢して読んで下さった諸君にお礼を申し上げたい。この話は敗戦から10年間、夜学を続けた一人の若者のショート・ヒストリーである。生活の糧を得ることと勉強を続けることは、密接不可分なため、このようにやや読みづらいものとなった。実名を出させていただいた先生方には話の真実性のためにお許し頂きたい。学生諸君に折角の機会であるから申し上げたい。わが国には「何時か、誰かが骨を拾ってくれる。」という諺がある。これは「青年時代には将来のことなどに思い患うことなく、一図に打込みなさい。必ずどこかで見ている人がいて、認めてくれ世話をしてくれるものだ！」という意味である。そして年長者の役割は若者を暖く見守り、励ましてやることであると考える。このような社会が、これからも続いてくれることを望みたい。

建築工学科教授 笠井芳夫先生最終講義

コンクリートとともに45年

本学部創設以来、建築工学科で教鞭をとられてきた笠井芳夫先生が、平成10年4月14日、定年により任期満了の日を迎えられました。

笠井芳夫先生は、昭和28年日本大学工学部（現理工学部）建築学科を卒業され、昭和31年に大学院工学研究科建設工学専攻修士課程を修了されました。

昭和23年日本大学雇いとして勤務されて以来、同32年助手、同34年専任講師、同41年助教授、同48年教授に任用され、約50年の長きにわたって日本大学に献身されました。熱心な学生への教育に加え、本学部では学生担当、研究所所長等の要職を歴任し学部の運営と発展に尽力されてこられました。

その一方で精力的に行われた研究は、常に世界および日本の研究者の注目するところでした。前半生においては「コンクリートの初期強度・初期養生に関する研究」に取り組み、これを纏めた論文に対して、昭和44年に日本大学より工学博士の学位を授与されました。また、この業績に対し、昭和48年度(社)日本建築学会論文賞、昭和50年度には(社)セメント協会論文賞を受賞されました。また、さらに研究の幅を広げられ、コンクリートの耐久性、コンクリート構造物の解体工法や建設副産物の再利用ならびにコンクリート構造物の非破壊検査方法やコンクリートの製造・施工時の検査に必要な試験方法などの開発を手がけられ、数多くの業績をあげられました。これらの業績に対して昭和60年度(社)日本コンクリート工学協会技術賞、平成4年度(社)日本非破壊検査協会功績賞を、さらに平成5年には原子力施設のデコミッションングに対する貢献により科学技術庁長官賞を受賞されました。

また、学協会の運営・発展にも貢献され、各学協会の重要な委員長・主査・幹事・委員を精力的に努められました。

最終講義は、4月14日午後2時40分から90分、本学部5号館401室にて、開催されました。先生のご業績の大きさを物語るように、金井清先生（東大名誉教授、元日大副総長）、建築材料界での大先輩にあたる洪悦郎先生（北大名誉教授）、大島久次先生（元千葉工業大学教授）、同時期にご活躍された毛見虎雄先生（足利工業大学教授）、小池迪夫先生（東工大名誉教授、現千葉工業大学教授）、上村克郎先生（関東学院大学教授）、現在の建築材料界を先導されている友澤史紀先生（東大教授）はじめ多くの他大学の先生、理工学部、工学部の先生、学協会を通して親交の深い方、桜建会（日本大学建築系OB会）会員、研究室OB・OG、そして本学

私的なこと

教職員，在校生，総勢280人を超える方々に列席頂き，開催されました。

内容は，以下の通りでした。

1. コンクリートの強度
2. コンクリートの初期性状
3. コンクリートの試験方法
4. コンクリートの混和材料
5. コンクリートの耐久性，耐熱性
6. RC構造物解体工法・建設副産物の再利用
7. 省資源・省エネルギーセメント・その他

講義終了後，笠井芳夫先生主催のお礼の会が和やかに行われ，盛会の内に，教授として最後の1日の全日程を終了されました。

笠井芳夫先生には，これからも非常勤講師として，そのまま教鞭をとっていただく他，研究はこれまでと変わらず，松井・湯浅研究室において松井 勇教授，湯浅 昇専任講師，学生とともに研究を進められる予定であります。いつまでもお元気でご活躍されるよう，祈念しております。



最終講義の様子

随 想

定年退職を迎えて これからどうする、それからどうする

定年を意識したのは65になった時であった。「これから数年で大学を辞めることになる。」と考えたが「何をするか?」となるとはっきりしたものは生まれてこなかった。

強いて言えば、かねてから温めていた「コンクリート総覧」の編集と、これまでに発表した論文の総目録を作成することであった。前者は建築、土木、化学の先生約90人をお願いして、5年を費やして今年5月に出版された。後者は周 建東さんと横山 清教授の協力を得て何とかまとまったが、結構大変な仕事であった。最終講義は全て松井 勇教授を中心とする方々によって計画され70歳の誕生日の前日4月14日に何とかつとめることができた。

45年のコンクリートの勉強を90分で話すことは、慌ただしいことであったが、大勢の先輩、コンクリートの研究者、OB、学生に囲まれて本当に感動したひとときでした。

皆様から「ご苦労様でした。」「おめでとう。」と言われて何とはなしに「俺も定年まで頑張ったぞ。」という満足感に包まれたものであった。

それにしても、1948年から大学に勤めて50年、大学の卒業研究としてコンクリートの勉強を始めてから45年、興味の向くままに、まるでダボハゼのようにコンクリートのいろいろなテーマに食いついて、研究室のスタッフや学生と一緒に実験・研究を続けられたのは本当に恵まれたことであった。これも、日本大学という大きな傘に包まれていたからと感謝している。

さて、本論に戻って、「これからどうする。」と言われても、人は過去・現在・未来と連続する今日を生きているのであるから、過去を全て切り捨ててしまうことはできない。そこで、今考えていることは、45年も大学で教え、建築材料やコンクリートの勉強を続けてきたのであるから、これに関係した仕事をもう少しやってみたいということである。

有難いことに、週1～2回学校に出て建築材料の話をすることができそうであるから、まずこの仕事を大事にしたい。「人が生きるということはどういうことか」、「研究とはどういうものか」をいくらかでも伝えていきたい。コンクリートについてもゼミナールの学生と一緒に勉強したり、研究の助言ができればと考えている。このほかいくつかの公的委員会の仕事も大切にしたい。

さて「これからどうする。」と詰め寄られると、本当に困惑してしまう。要するにEveryday Sundayという状況になったとき、生き甲斐のある生活をどう創造して行くかについて、真剣に考えてこなかったということになる。

「庭仕事でも本気にやりましょう」と答えたいところであるが、さてどうなるか。四季折々に変化する植物を育てることは、農家の生まれである私にとっては子供の頃の仕事であったし、「人間は自然の子供である。」というのは、私自身の信念でもあるので続けて行きたいが、植物の品種改良のような仕事は考えただけでも大変なので止めにしたい。今までのように庭に雑草が生い繁り、木々は乱雑に芽を伸ばしてゆくことになるろう。

前々から絵とか書に取り組みたいとは思っていたが、もともとこういう才能に恵まれているとは思わないので、始めるまでは分からない。全く手を付けないままで終わるかもしれない。健康を保つためには、歩いたり、水泳をやりたいと思っている。これからは無理なくできそうな気もする。水泳は妻の則子と、週に一回位一緒に行ければと思う。

さて、何とも心細い夢とも言えないものになってしまったが、はじめから「こけ」の一念で続けてゆけば、また「花の山」に出会うかも知れない。その前に身体の方が不調となり、何もできないかも知れない。

人の明日のことは全くわからないからである。少し飛躍するが、死ぬ時は悔いだけは残したくないものである。「俺も何か、爪跡を残したぞ」という満足感をもって逝きたいものである。葬式はやらないことにしたい。

実は則子と結婚したときも神前とか仏前で式はやらなかった。仲介の森徹先生、両親、親類一同の前で誓約書を朗読して結婚の証とした。

森先生は亡くなる数年前にその誓約書を返してくださった。今、私共の手元にあるが昨年結婚40年を迎えたので、余程のことがない限り、この約束は守ることができそうである。

一寸脱線したが、死者の葬送について、最近考えていることを述べれば、「〇〇〇〇を偲ぶ会」、「〇〇〇〇を酒の肴に集う会」とか称して、49日に近いところで、生前、親交のあった方々が集まり、飲んで、食べて、旧交を温めて、ひとときを過ごすというのはどうであろうか？

今の葬式は遠く新幹線や、飛行機で来た入が式に列席し、焼香して慌ただしく帰って行く。これは何とも味気なく、折角故人の縁で集まったのであるから、生きている人々に勇気や元気を与えるような意義のあるものにしたらどうだろうか。

さて、この辺で紙面が尽きた。筆を欄きたい。



妻 則子と (1986.12)

若い友人からの言葉

先生の略歴

教育者、研究者としての笠井芳夫先生の軌跡は、箇条書きにするにはあまりにも広く、深い内容を持っています。笠井先生の研究に捧げる情熱、シンプルで核心を突く実験手法を次々に繰り出すその発想、地球環境への思いやり、等々は一体何に由来するのか、笠井先生を存じ上げる者が等しく知りたいと願うところではないでしょうか。しかし先生の略歴からその由来を探るのは容易ではありません。ふだん先生にお会いする機会の多い者として、先生に詳しくお話を伺い、略歴を補足することにいたしました。

笠井先生は昭和3（1928）年に山梨県でお生まれになりました。幼少の頃、学校の得意科目は作文と持久走とのことです。小学校高学年では自らジャガイモ、サツマイモを栽培し、植物や昆虫に興味を持っていました。また、土蔵の2階にピーカー、アルコールランプなどを持ち込んで実験をしていたそうです。実習レポートは常に1番でした。当時の愛読誌が誠文堂新光社の「子供の科学」であったことも頷けます。

その後、山梨航空機関学校に進学、飛行機の整備を学ばれました。戦争末期のことですから繰り上げ卒業となり、大日本航空株式会社（現在の日本航空）に入社されました。MC-2型、DC-3型などの旅客機の整備補助として働き、終戦を迎えました。多くの青年にとって終戦は大きな転機だったのですが、先生もこれを機に勉学を再開されました。技術者として身を立てたという思いは、このときすでに持っておられたものと思います。

笠井先生は昭和21（1946）年に神田のYMCAの裏にあった御親戚の製材工場に勤めながら夜間中学3年に編入しました。その頃の生活を「夕方5時に仕事を終わらせてもらい、学校に行き10時頃帰ってきた。それから食事をして、バラックの工場の屋根裏で12時頃まで勉強して翌朝6時に起きる、という生活が続いた。（「築」：日本大学生産工学部建築工学科機関誌，Vol.18，No.3，pp.2-4，1995）」と述べられておられます。

そして昭和23（1948）年4月に日本大学高等工学校建築学科に進学して本格的な建築の勉強が始まりました。この年の11月から雇として江崎伸市先生（故 日本大学建築学科構造系教授）の助手を務め、昭和28（1953）年3月卒業論文「鉄筋コンクリートの電食に関する研究」をまとめられました。

卒業後、松井嘉孝先生（故 日本大学建築学科材料系教授）の助手となり、また大学院にも進学して、夜学生の実験指導と研究に打ち込み、最も忙しい日々を過ごされました。修士論文は昭和31（1956）年3月の「コンクリートの疲労降伏点に関する研究」でした。

昭和34（1959）年専任講師となられ、理工学部・短期大学部の実験の指導をされておられましたが、昭和41（1966）年第1工学部（現 生産工学部）の発足に当たり助教授として、建築工学科に赴任されました。

笠井先生は昭和44（1969）年に「コンクリートの初期強度・初期養生に関する研究」で日本大学から工学博士の学位を取得されました。

その研究の端緒は昭和35（1960）年頃に遡り、冬期施工が予定されていたビール工場のサイロのスライディングフォーム工法によるコンクリートのための実験だったといわれます。低温室がないため、混練水に氷を入れて屋外で5℃くらいでコンクリートを練り上げたそうです。

コンクリートの初期性状の研究はその後昭和48（1973）年には日本建築学会論文賞を、昭和50（1975）年にはセメント協会の論文賞をそれぞれ受賞することになりました。1978年から1982年までRILEM（建築材料・構造に関する国際研究機関連合）にはProperties of Concrete at Early Agesという技術委員会（委員長：G.Bergstrom）が組織され、笠井先生はその主導メンバーとして活躍されました。

その結果はRILEMの機関誌「Materials and Constructions」に掲載されました。当時の企業の若手研究者であった筆者等は「日本人にもこのような貢献ができるのか」と驚き、論文の本数としてカウントされる訳でもなく、苦勞だけが多い英文ドキュメントの作成にも手を抜かない研究への姿勢に感銘したものでした。

笠井先生は昭和33（1958）年に御結婚され、その後3人のご子息をもうけられました。奥様とは日高先生（当時 東大地球物理学教授）の主催するパーティで知り合われたとのこと。当時、この様なアカデミックなサロンがあり、男女の出会いの場が提供されていたというのは羨ましい限りです。

息子さん達は先生の影響の下で、当然の如く科学・技術への道を歩まれた良く知られるところ。因みにそれぞれの息子さんの理科の自由研究では、先生の指導の下で、いろいろな植物の葉からの蒸散量を正確に測定したもの、鉄の板に色の違うペイントを塗り夏の炎天下の屋上に曝して表面温度を測定したもの、薄い醤油や塩水・砂糖水中に放った時の、ほうふらの生存時間を測定したものなどがあり、いずれも優秀賞を受賞したことは、教育者としての笠井先生が密かに誇りとしておられるようです。

笠井先生の名著「材料科学概説」は昭和52（1977）年に彰国社から出版され、現在も多くの学生や技術者の教科書として読まれています。アジアのある国で、「先生の本にはお世話になっています」といわれて、見るとそれは現地語に翻訳された海賊版だったとか。先生は「喜んでもらっているのだから咎める気にはなれないよ」と笑っておられました。

笠井先生は昭和46（1971）年から建設副産物の再利用に関する研究に意欲的に取り組み、大きな実績を残しておられます。昭和58（1983）年に発足した「コンクリートと組積造の解体と再利用」に関するRILEM技術委員会の委員をなり、昭和63（1988）年には第2回RILEM国際シンポジウムを建設省建築研究所と日本大学共催で開催し、学術委員会委員長を務められました。

国際会議を開催しホストの役割を努めることは、なかなか荷が重いものです。そのような困難にも関わらず、多大の努力をされたのは、この研究のテーマが先生の地球環境への思いやりに直結するものもあったからでしょう。

卒業する学生に向けた先生のお言葉にも地球環境に対する御自身の思いが伝わってきます。その一節に「われわれは、この美しい、愛しい地球に一瞬の生を受けた間借り人だと心得て、壊れ易いガラス玉のような地球にそっと住まわせてもらいたいものです」（「築」、Vol.18, No.3, p.1, 1995）。

笠井先生には、これからも健康に留意されて後輩の指導と、ご自身の生活を実りあるものにされることを祈念申し上げます。



山梨県・山宮たつみ会（小学校の同窓会）の旅行で（1999年）

謝 辞

継続は凡人の力か？

1998年4月14日に大学を退職した。この日最終講義をすませ、多くの先輩やOBから「ご苦労様でした」、「おめでとう」とねぎらいの言葉をいただき、「終わった！」と感じ、何やら満足な、幸福な感慨に包まれたことでした。

大学に勤めてから丁度50年、コンクリートの勉強をはじめてから45年、こんなに長い年月、私にとってはそんなに長いとは感じなかったが、教育とコンクリートの研究に打込むことができたのは、日本大学という大きな傘があり、OBがいて、学生がいて、その人達に援けられ、守られて、きたことに心からありがたく、感謝している。

これからの生き方、実は今のところ全く決っていない。4～5年はこれまでの仕事の続きをやってみたいし、将棋、囲碁、マージャン、ゴルフなど全部駄目人間なので、好きな庭仕事と手すさびに何かははじめようかとは考えているが、どうなることか？ 通説によれば、私のような人間は、急速に「体力・気力がなくなって、ぼける」ということであるが、人体実験の一例となるかも知れない。

桜建会については、材料施工研究懇談会を除けば、久しくご無沙汰しておりますので、何かお返しができるかと考えている。

これからも、「気張らず、できることを、前向きに、毎日を生活してゆく」ように努めたい。

(笠井芳夫)

随 想

敗戦後八年間夜学に通った男の記録

笠井芳夫（鴨狩出身）

8月になると、高前寺のお祭りがあり、屋台が盛大に並んだ。私の家はその人達のリヤカーを預かり、水をあげたりしたものである。屋号は「仁家」父は保一、母はあさぢで、私が生まれたのは、昭和3年4月である。山宮小学校入学の日、母に手を引かれて葛籠沢川の土手道をつまづきながら歩いたこと、そして一本松は今も故郷の記憶として鮮明に脳裏に刻み込まれているが、残念ながら枯れてしまったという。

小学校6年のとき、同級生の何人かは甲府や身延の中学へ進んだが、体操が苦手で、鉄棒の逆上がりができず、受験に自信がなくて中学へ行きたいと申し出ることはなかった。親からも何も言われなかったのが、そのまま高等小学校へ進んだ。父母の寝物語に「春蚕が腐ってどうしよう」とか、「早く行商に出かけなければ……」というのを聞いていて、長兄茂を頭に私は次男（実際は四男であるが兄二人は死亡）で全部で8人の子供が居り、生活は大変であった。小学校4・5年生のときから、津向の宮沢武さんを慕い、『子供の科学』を読んで、やさしい化学実験をやったりしていたが、高等小学校を卒業のときには、どうしても飛行機の勉強がしたいと当時玉幡にあった「山梨航空機関学校」へ進学した。同級生が鴨狩、岩間、落居などから5～6人いたように思う。

敗戦の前年11月繰上げ卒業し、航空学校の同級生の縁で大日本航空（現日本航空）に面接だけで入社した。熊本で3ヶ月の訓練を受け、羽田空港に整備員見習として配属され、終戦は（昭和20年8月15日）富山市郊外の八ヶ山飛行場で聞いた。

この年11月になって、神田須田町のYMCA裏にあった従兄の上田 実さん（岩間の上田屋の出身）の製材工場で働くことになった。年が明けて1月、歩いて5分ほどの正則学園中学の夜学に編入学し、昭和23年3月卒業した。当時「生活の原点は衣食住にあり」ということで「建築でも勉強するか」と駿河台の日大高等工学校の建築科（夜学）に入学した。そこでまた、縁があって、日大建築教室の江崎伸市、松井嘉孝両先生のところで電話番をし、給料をもらうことができた。昭和28年3月、新制大学二部建築学科を卒業した。1年して大学院に進学し、昭和31年修士課程を修了した。その後ずっと日大に職を得て、平成10年4月14日（誕生日前日）70歳で無事定年を迎え、名誉教授になった。

この間、建築材料を教え、多数の卒業生と、これまでに11人の工学博士を直接指導した。主

としてコンクリートの勉強を行ってきたが、「建築学会論文賞」ほかいくつかの学協会賞と「科学技術庁長官賞」などをいただいた。「こうしてみると私は本当に運が良かったと思う」。戦争末期であったが、大日本航空(株)に就職でき、敗戦直後には神田に住まい、そこから夜学に通い、昭和22年からは父と上田 実さんの計らいで千駄ヶ谷に6坪の家を建ててもらい、昭和33年に結婚するまでここに住んだ。

今の津田沼の家は、近くの公団の工事主任が大学の同窓生であり、実費で小さな鉄筋コンクリートの家を建ててくれた。

夜間部3年生のとき、肺病になり鰹沢病院に半年入院したが、首になることはなく、大学院2年間も大学から給料をいただいた。大学紛争のときは、助教授であったが学生の味方をしたということで、1年間、講義停止となり、問題教員ということで大学本部の理事会の審議に挙げたが、当時理工学部長の斎藤謙次先生が「笠井はそんな男ではないと思う……」と発言して下され首が繋がったという。

現在も週2～3回大学に行って調べ物をしたり、研究の手助けをしているが、ありがたいことである。

最後になったが、私の人生において妻則子に会えたこと、そして3人の男児に恵まれたこと、則子は彼らを立派に育て家を守ってくれた。これは何物にも替えがたいことである。こうしてみると常に「誠実に生きること」、第二に「他者を大切にすること」それは自分が大切にされることのはじまりである。

そして欲を言えば、常に自分で考え、自分で何か新しいものを作り出す、すなわち創造性が大切である。

幸いDNAにも、たいした不具合もなく、73歳まで健康に生きてこられた。これもご先祖はじめ、これまで世話になった方々のおかげである。これからは何かできることをして、社会に、大げさに言えば地球に恩返しをしたい。



昭和33年当時の父母

随 想

日大建築教室に勤めた夜学生の青春

笠井芳夫 (新制工学部 2 部建築学科1953年卒業)

中学の最終学年に至り、「もっと勉強を続けたい!」と考えるようになる。何を専攻するか迷ったが、人間の生活の根本は「衣食住にあり」という誠に単純な思考から、建築を勉強しておけば食うには困らないであろうと考え、駿河台の日大高等工学校(夜学)の建築科を受験し、入学することができた。

さて1948年11月頃に、建築教室の江崎伸市先生のところで「電話番号を探しているが、お前どうか」という話がきた、早速、3号館3階の南面した江崎先生の部室を訪ね、面接していただいた。その日のうちに「都合の良い日から出勤しなさい」と言われる。これがちょうど50年間続いた日本大学勤務のはじまりであった。

年が明けて、49年4月から高工1年の学生は新制大学2部1年に移行できることになり、希望者は簡単な試験を受けて移行した。そうしなかった人はそのまま高工を続けて卒業した。こうして、日本における高等教育の大改革の初年度から大学夜間部の学生になった。1年生のときは一般教育として、土木、建築、機械、電気、工化、すべての学科の学生がほぼ均等に集まり1学級が構成された。この制度は数年のうちに、消滅してしまったが今考えてみても目的や興味の違う若者と一緒に勉強できたのは、よかったような気がする。

私が部屋番をしたところは、松井嘉孝先生の部屋であった。常時、旧制学部3年の卒業研究の学生がやってきて、江崎先生の指導による接着剤の合成実験を行ったり、資料を整理したり、雑談をしたり、それは活気のある部屋であった。学生の多くは、陸軍士官学校出身とか航空隊にいたとか、海軍にいたとかいう人が多かった。何やらアルバイトをしていた者もいたが、真面目に勉強していたように思われた。

私は特に定められた仕事もなく楽しく勉強できたが、年末の試験のときには研究室に泊まり、真冬でも暖房はなく、しんと冷える夜中の2時3時頃まで試験勉強をしたものであった。ある朝、7時頃に外へ出るとあたり一面白銀の世界となっていた。ニコライ堂東側の石垣(今は金網が張ってある)にへばりつくようにあった2階建の菓子屋へ行き、ふたつ割りしたコッペパンにリンゴジャムを薄くつけたものと、牛乳を1本買って朝食としたのを昨日のこのように覚えている。それでも「ボロはまとえど、心は錦」のたとえで、「みすぼらしい」とか「つらい」とか思ったことはなかった。これは1949~51年頃の食べるものさえ不足した日本社会で

は当たり前のことであった。

2年生になると構造力学第1は江崎伸市先生が担当され、夏休みには静定ラーメンの反力、曲げモーメント図、せん断力図を100題以上も解いた。3年生の構造力学第2は齊藤謙次先生の担当であったが、はじめ2～3回授業を受けたが、その後は助手の先生が代行された。齊藤先生からは大学院のとき、不静定ラーメンの解法の授業を受けた。黄土色の表紙の学位論文と思われる本を、ところどころミスプリントを直したりしながら講義を聞いた。それにしても先生は旧制学部の卒業論文として、この解法を着想されたといわれたが、大変な先生であったと思う。このほか、坪井善勝先生から「鉄筋コンクリート構造」を、加藤渉先生から「応用弾性学」の講義を受けた、計画系としては、笠原敏郎先生から建築法規を、市川清志先生から都市計画を勉強した。伊藤喜三郎先生は非常勤であったが1年生の製図の最初に「フンドシひとつで掛かってこい！」とはっぱを掛けられた。小林文次先生から建築史の講義を受けたが、当時先生は後に学会賞を受けた「メソポタミヤの建築」に打ち込んでおり、外国の大学の客員教授として出掛けることが多く、そのため休講が多かった、4～5人の学生と共に先生のところへ行き「休講をなくしてください」と申し出たところ、先生は横を向いて「君、本郷では講義なんかそんなにないよ」といわれ哑然としたが、「勉強は自分でするもの」と実感した。今日のようにシラバス（講義要目）でがっちり縛られ、学生の多くは「教師の講義に頼る」というより「聞き流している」という風潮があり、これは本質的に考えてみる必要がある。

さて、コンクリートの勉強をはじめたきっかけは、松井嘉孝先生が、1950年（昭和25年）頃からコンクリートの実験をはじめられ、それを手伝ううちにだんだん面白くなったものである。1953年3月学部を卒業したが「もう少しやってみないか」という話があり、そのまま1年間研究室に置いていただき、翌年4月から大学院の修士課程へ進むことになった。幸せにも月給をいただきながら大学院で勉強させていただいた。

大学院修士の学位論文は「コンクリートの降伏点に関する研究」であった。アムスラー試験機により、1万回まで手動で繰返し荷重を載荷した。夜も眠らずこれは大変な作業であったが、学部の学生が交替で作業してくれた。供試体作成のため、湿った砂を4号館前の道路に、それから中庭一面に干した。乾いたら2人1組で勢いよくふるいでふるった。砂ぼこりがもうもうと立昇り、多くの先生方に迷惑をかけたが、どの先生も辛抱されて、苦情はなかった。

学部3年の一学期が終わって夏休みに入ったとき、体調を崩し、レントゲン検査の結果結核の初期と診断され、田舎の病院に入院した。3年後期の授業はほとんど受けなかったが4年で卒業できた。休職中も給料をいただいた。今にして想えば、日大からは計り知れないほどの恩恵を受け、たくさんの方々の有形無形のご指導やご支援を受けた。最後に、ここに実名を書かせていただいた先生方は皆他界されている。改めて時の経過を感ずる次第である。

毛見虎雄氏自費出版「ひよこ子供会思い出集」(2007.07)

「ひよこ子供会思い出集」に寄せて

笠井 芳夫

「ひよこ子供会」この会名を聞いたとき、私は大変な感銘を受けた。あの卵から生れたばかりの黄色い産毛うぶげに包まれた「ひよこ」、この子は誰かに頼らなければ生きてゆけない。ただ「ピヨ、ピヨ」と鳴くだけである。この子達を暖かく包んでやる思いやり、これが夜学の大学を卒業してすぐの若い建築技術者に宿ったということ、私はこのことに先ず感動した。

「子供相手に紙芝居をやっている」ということを聞いてはいたが、まさかこのように「子供塾」というか「人間塾」とも言うべき、書道、読み方、作文、ソロバン、絵画、ピクニック、旅行と、ひよこ達のために給料をはたいて、寝食を忘れて7年も活動したということは全く驚くべきことである。

小学5、6年生を頭に80人もの子供が集まって来て、そしてそれを支援する親たちが働いていたこと、子供を連れて新潟へ旅行に行ったり、デパートへ行ったり、これらを大きな事故もなくなしとげたこと、私には全く考えられない世界である。

今日まで毛見さんと50年以上も付き合い合って来て、彼の若き日にこのような超人的な生活を持っていたということは全く知らなかった。「善行は人に隠れて行なうもの」というが、将にその通り実践したのである。この子供会に集った子供達はきっと人生の出発の時節にこんなに暖かい人の輪のひとりとして、何ものにも代え難き宝をもらったと思う。本当に君達は良い先輩、良い先生に出会ってよかったと思います。

この機会に、この思い出集にも書いていない毛見さんのプロフィールを綴ってみたい。毛見さんは、昭和22年3月、高田工業学校を経て長野工業学校の建築科を卒業した。直ぐ戸田組(現戸田建設)に入社した。そして、昭和23年4月、日本大学高等工学校建築科(神田駿河台にあり、夜学3年間で工専程度の学校)に入学した。昭和24年4月、学校組織の改組により、日本大学新制工学部(現理工学部)2部建築学科に入学し、昭和28年3月卒業した。卒業のときは総長賞をいただいた優秀な学生であった。昭和29年の年頭から子供会設立活動をはじめ、1ヶ月経ずして発足させるなど、驚くべき実行力である。以来7年間、一筋にこの活動の中心として頑張ったのである。この間、戸田建設の工事現場の工事記録をガリ版で印刷して社内に配布したという。

昭和34年ころから戸田建設の研究室に移り、技術研究所を立ち上げ、精力的な研究を続け、「コンクリートのポンプ圧送に関する研究」によって工学博士となった。この論文は日本建築

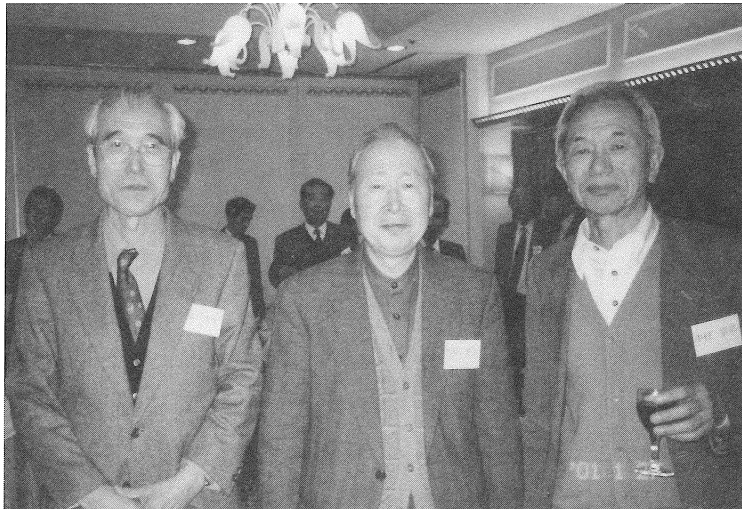
学会の論文賞を受賞した。現在でも、コンクリートのポンプ工法については右に出る人はいない。

東京市長であった後藤新平は晩年「金を残す人は下」「仕事を残す人は中」「人を残す人は上」と言っているそうあるが、毛見さんは、仕事も、人も子供会を通じて残した。この人達はそれぞれひよこの頃、素晴らしい日々を持ち、そして親鳥になり、きっと社会のそこので活動されていることと思います。

「ひよこ子供会」ばんざい。

(日本大学名誉教授)

註：この一文は畏友、毛見虎雄さんが、2007年に編集した彼の若き日に奉仕したひよこ子供会の活動について、今日、成人となられた人達の寄稿、証言、当時の書、絵などを集め、子供会の活動記録と共に自費出版されたものへ、冒頭に書かせていただいたものです。



左より毛見虎雄さん、笠井、中村宗司さん

「私の歩んだ細い道」大岸佐吉先生ご退官記念会（1993.07）

退官記念

—禅僧の趣きあり—大岸先生

笠井 芳夫（日本大学教授）

大岸先生に初めてお会いしたのは何時頃であったのか定かではありません。先生とのお付き合いを想い起こすとき、どうしたことか、私の恩師である松井嘉孝先生が居られ、木沢久兵衛先生、大島久次先生と連想されてくるのです。これは私のメモリーがこの順番に入力されているためでありましょう。木沢久兵衛先生の「スリップフォームの滑動抵抗に関する研究」と私の「コンクリートの初期性状に関する研究」とが類似した分野があり、何かとこの三先生にお世話になったためと思われませんが、その流れの中に大岸先生が何時頃からか、お見えになったのであります。

大岸先生と実際に親しくさせていただいたのは、セメント・コンクリート研究会の幹事会などであろうかと思われます。年2～3回はこの研究会でお会いし、それからの建築学会の大会、コンクリート工学協会年次大会などでお話するようになりました。そんなご縁で「建築材料工学」の本を一緒に書かせていただきました。

先生は、「硬化コンクリートのレオロジーの研究」をされ、一分野を開拓されました。また「高温下に於けるコンクリートの力学的挙動の研究」を手掛けられました。難しい方程式を解かれ、丹念にまとめられておられます。先生には大学を卒業された後、原子力研究所に勤務されていたようですが、その頃のテーマをずっと追求されていたように思われます。高速増殖炉の開発には、特にコンクリートの耐熱的挙動を検討する必要がありますが、早くから焦点をそこに合わせて居られたように思います。

私共の研究と直接かかわりのあるのは、棚橋勇先生が分担された「フレッシュコンクリートの迅速分析装置の開発」と私共の「フレッシュコンクリートの単位セメント量の判定試験方法」、また最近小野博宣先生が分担されている「コンクリートの電気抵抗」と私共の「セラミック素子による含水率の測定方法の開発」とは同じような研究であります。何かと啓発されるところが多く、今も良きライバルの関係にあります。

先生は書画をよくされていることは、早くから承知しておりましたが、香道を嗜まれることを何かの機会に拝聴して、たいへん感銘を受けました。私のように「無芸小食（大食いではありません）」の者には、先生の様な学問と風流の達人に対して何となく気遅れがするものです。先生はそのような素振りを見せることなく、何時も篤農家か、禅宗の僧侶のような風貌をその